

大輪の菊冷々と咲きてあれ齒を磨ぎつつも唇つめたかり  
 朝々を散る花あればおのすから生きゆく意識きびしかりけり  
 蓮池に蓮の花咲く清らかな朝の目覺めを欲りて久しき  
 冬枯れの山のへに佇ち濃濫の海見ておしが悔となり來つ  
 夜の庭を歩む仕様なぞすべもなし他郷の山に圍まれてゐて  
 閉まりし部屋に香をこめて藥草を煮をれば寒き霜夜にも似き  
 樹々の葉の一樣に散る冬にむきすまじく心荒るゝ思ひす  
 郵船俱樂部の屋上を今し離れたる眞晝の月は海にかたぶく

夏秋山麓居詠草

石川國武

初夏のけはひとなりしこの夜ごろ肌をぬぎては風にふかるる  
 杉むらにたちこむる霧木の間ゆも這ふとこそすれわがゆく道に  
 霧ふかみ水戀鳥の聲絶へし靜寂のみちをわけは歩みつ  
 かなかなのこゑ親しもよ松ケ枝に暮れなすむ陽のひかり残れる  
 棕栢の葉にふく風ありて動かざる山の上の雲のゆゆしきをみつ  
 わたる日に空は照りつつ山の邊に凝る雲見れば炎暑おもほゆ  
 窓の邊の楓にふきくる風をさへうれしみ思ふ暑き家居に  
 夕ぐれの明るみにして廣原に遊ぶ童らが見ゆ旗うち振りて  
 すかし見るすだれの外はすがすがし照りわたる月の白く光るも  
 夕づきし深山の森に鳴く蛸の聲まれになりぬ夏ゆくらむか  
 夕づきし葡萄の棚にふさぶさと垂るつぶら實の靜けさに居り

に進み出て「お釋迦様決して御案じ下さるなよ。如來なき後二千年。末法濁惡の世とならば、吾等必ず佛の使となり慈悲の衣に堪忍柔和の袈裟打ちかけて命を的に法を説くべし。大難も來らば來れ。世の爲一切衆生の爲捨つる命、など惜しからん。吾はこれ佛の使なり。衆の前に恐るゝ處なし。」といふのが此の經文の意である。何といふ強い力のある言葉だらう。つら／＼世間を眺むるに生あるものは必ず死す。尊きも賤しきも皆この道理から逃れる事は出来ない。定められたる運命の前には全世界の權勢を以つてしても、千萬無量の金力を以つてしても一分時の壽命すら伸ばす事が出来ない。生老病死の苦しみは何人も絶対に逃れる事は出来ない、生れ乍らに背負つて來る運命なのである。どうせ死ななければならぬいとすんならば短かい生涯を、親を苦しめ世を呪ひ地獄に墮ちてかくも苦しみに悶えつゝ死んで行くよりは、此の御經に書いてある様に、いつそ佛の使となり人を救ふ爲に命を捨てた方がどれ程幸福であ

現世は今日もかなしや亡き母を偲びて心泣かんとするも（命 日）  
曼珠沙華は毒なりと叱へどきかばこそつみとり居りし幼妹世になし  
豫備少尉林是幹先生召集されこの峽の町きほひたちたり  
みまかりし防人の母ならむ白木の箱抱き来る人老ひましておぬ  
松虫の窓邊にきたりなきたつる夜はしみじみと思ふ事多し

### 拾ひ屑一束

東

菑

庭隈の紅き山茶花咲き初めて寒き曇りを四十雀の來る  
くぐもりの夕べさむしく山茶花にひつそりと來て鳴くみそさざい  
山並みのはたては晴れてすむ空に八ヶ高嶺の雪ぞ光れる（下部街道）  
ひとひとり通らぬれば椋の樹に雀はさわぐうるさきまでに  
ひそまりてものの音たへし夜の湖にうつる三日月光鋭く  
夜の湖は遙く寂けし吾が佇てる汀を洗ふ波もあらなくに  
朝霧の林をとほし窓に入る陽すぢはずでに秋づきにけり  
冬の陽のとどかずなりて庭隈の山茶花のはなは散りしきてあり  
深霜は日にけにきびし庭への南天の實は朱味そめたり  
風のしづみし夕べ裏山に落葉をさむく踏む鳥のあり  
ここに來て心ひろらなり富士川の蜚蜨として白き一すぢ  
雪霧のふかくたちこめ見もわかぬ谿間にぞ來て鳴く鳥のあり  
曾つて師が住まひし釋迦堂今はなくて夕陽に淡く咲く胡蝶花の花  
胡蝶花の花むらがり咲ける崖なだり夕日あかるくしばしを照らす

つたらうと今になつて悔悟の涙がさんせんとして枕をぬらすのであつた。

死に行く我が子の枕下で父母はゞ茫然自失してつくねんと坐つたまゝ、手を合せて上人の御經の聲を聞いて居た。恐らくこれが此の世の最後の別れであらうと父母の顔を見上げた時あれ程肥つて居た父が今は六十の坂を越えて瘠せ哀へ、見るも哀れなおいばれ爺になり果てて居る母は雪より白い白髪頭。噫、此の老ぼれた父と母を残して死んで行つたなら、後に残つて父と母が何を便りに暮すだらう。

「噫阿父さん、お母さん。悪うございました。今日迄親不孝の数々。二十三の春。今こゝで私が死ぬといふ事を知つて居たなら、あなたに親不孝するのではなかつたのに、それは皆私に信仰心がなかつたからです。何卒お許し下さい。もう私はあの世へ旅立たなければなりません。死んだなら一度御釋迦様の御膝下へ行つて、立派な御弟子となり今度この世に生れて來る時には必ず真心こめて親孝行を